

國學院大學學術情報リポジトリ

戯曲『人類館』における沖縄差別と葛藤

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Okinawan literature, The House of Man, Chinen Seishin, Okinawan discrimination conflict 作成者: 李, 韋卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001626

戯曲『人類館』における沖縄差別と葛藤

A case study on the Okinawan discrimination and conflict in drama, *The house of Man*

李 韋 卓

キーワード：沖縄文学 『人類館』 知念正真 沖縄差別 葛藤

Key words: Okinawan literature The House of Man Chinen Seishin Okinawan discrimination conflict

要旨

沖縄出身の戯作家、知念正真は1976年、戯曲『人類館』を創作した。その作品は沖縄で起こった近現代の重大な事件を題材として、各シーンを展開する。明治政府の「琉球処分」のもとで、琉球王国は終止符を打たれ、沖縄県が設置された。日本の一部となったとは言え、よく本土に差別されてきた。そして、沖縄現状に直面する際、沖縄人の間でも食い違った見解がある。本稿は『人類館』における沖縄差別と葛藤を研究しようとする。

本稿は客観的な立場に立ち、まず、登場人物の調教師、陳列された男、陳列された女、三者の人物像がどのように設定されたのか、という問題を提出し、そういう問題を解明してから、さらに教育、戦争に関するシーンに絞って、日本本土からの差別を検討していく。そして、大和風に振舞う沖縄出身の調教師と陳列された男女の関係に着目し、沖縄内部における葛藤も研究しようとする。

Abstract

Okinawan writer, Chinen Seishin created the drama *The house of Man* in 1976. The drama developed its scenes based on the important events which had happened in modern times in Okinawa. Because of Ryukyu punishment from Japan's Meiji government, the fate of Ryukyu Kingdom stopped and Okinawan county was set up here. Although Okinawan county was a part of Japan in name, it was always discriminated by the locals People. In the face of Okinawan present situation, there are different views among the Okinawans. Okinawans fell into the nightmare—they were discriminated and there were internal conflicts among themselves. The article will analyze *The house of Man* and study the discrimination problem and conflict problem.

The article analyzed *The house of Man* in an objective position. Firstly, the article described the figures in each scene--- the trainer, the displayed man and the displayed woman and how the three figures were created. Secondly, the article explored the discrimination

problem from local Japan by using the trainer's education scene and Okinawan war scene. Lastly, The article studied the Okinawan internal conflict problem by using the relationship between the trainer who was born in Okinawa but behaved like a Yamato and the displayed man and woman.

はじめに

中継ぎ貿易で栄えた琉球は独立した国であった。明治政府の「琉球処分」のもとで、1879年、琉球王国は終止符を打たれた。沖縄県が設置され、日本の一部となった。日本の一部となったとは言え、日本本土並みの位置づけではなく、よく本土に差別されてきた。1903年大阪で開催された第五回内国勸業博覧会で、琉球、アイヌ、朝鮮などの異民族の土人を集め、見世物として展示したこと、いわゆる、「人類館事件」から、沖縄差別がはっきり捉えられる。第二次世界大戦において、沖縄は日本唯一の戦場となり、多くの沖縄人は沖縄戦で日本軍人に差別され、「集団自決」という形で、命の終わりを告げた。捨て子のような沖縄は日本に復帰した後、本土に差別された。

それ以外に、沖縄内部は直面しなければならない社会問題にどのように対処すべきか、積極的に日本本土からの教育を受け入れ、新しい生き方を開拓するのか、それとも、消極的に琉球人の古い習慣を受け継いでいくのかといった問題にも葛藤が起こった。すなわち、沖縄人は、日本本土に差別されたことと沖縄内部における葛藤といった悪夢にうなされてきた。

では、沖縄差別は文学作品の中に、どのように描き出されているのか。一つ注目すべき沖縄差別に言及した作品は、戯曲『人類館』である。『人類館』（初版は1976年の初演の台本と舞台写真を踏まえている）は戯曲という形で、沖縄の歴史を総括し、沖縄出身の戯作家、知念正真（1941-2013）の著した傑作で、1978年、第二十二回「演劇界の芥川賞」と呼ばれる岸田國士戯曲賞を受賞した作品でもある。『人類館』は知念正真の所属する演劇集団「創造」の第十一回公演のために書き下ろされた⁽¹⁾。コザを皮切りに、宮古、八重山をはじめとする沖縄本島だけではなく、日本本土の東京、大阪でも上演された。知念正真は、戯曲という形で、沖縄で起こった近現代の重大な事件を題材として、表現巧みに言い回す創作技巧

(1) 坂本（平敷）尚子. 沖縄人の自問自答—知念正真『人類館』再考. 演劇学論集, 2008(46).

で、沖縄差別を描写している。『人類館』から、教育、戦争などの面における日本本土からの差別、及び沖縄内部における葛藤が鮮明に捉えられる。『人類館』は沖縄差別を研究する上での見逃せない作品とも言えよう。

画期的な意味があり、初めての「沖縄発」の演劇作品である『人類館』から、沖縄の抱えている問題と沖縄差別がはっきり捉えられる。沖縄文学において揺るぎない地位がある。けれども、残念ながら、今までに、戯曲『人類館』に言及した中国側の研究成果は管見の限りかなり少ない。日本側の研究成果は次の通りである。

まず、『人類館』の各シーンについての研究成果である。

登場人物である「調教師ふうな男」(以下、調教師)、「陳列された女」(以下、女)、「陳列された男」(以下、男)三者の關係に視点を置いて、初版の『人類館』の全体的な内容を詳しく分析し、時代背景にも考慮を入れ、坂本(平敷)尚子は15個シーンに分けた。

シーン1は、差別の構造を提示し、観客の注意を喚起させる役割を果たす。「シーン2～4では、日本帝国主義下の大和・沖縄の差別・被差別、支配・被支配關係が提示されていた」⁽²⁾。シーン5から、大和・沖縄の支配者・被支配者の關係が一層明確にされていたことが分かる。シーン6～7では、日本政府が沖縄に強引的な政策を採り、沖縄風的生活習慣を排除し、沖縄人は沖縄人である身分によって差別待遇されるべきだなどの差別・被差別の關係は沖縄人が抵抗しても変わらないということが分かる。シーン8～11から、沖縄戦の時期、沖縄人は米軍からの被害を受けると同時に、大和人からも差別されることが提示された。シーン12～15では、調教師は男女と同様に沖縄人であることが分かり、爆発した芋で死んだ。男は調教師のように大和風に振る舞い、女は小屋に戻る形で、戯曲の幕を閉じさせる。

次は『人類館』における言語的な分裂についての研究成果である。

言語学的な立場から、「調教師」の言葉遣いを分析する新城郁夫は調教師の三つの話を例として挙げ、『人類館』における言語的な分裂を指摘した。第一に、「馴ればならんのラ」の「ラ」は「明かな訛り、(中略)沖縄口の訛りを潜ませている。(中略)「ウチナーヤマトグチ」が混入していることの明らかな証拠なのであ

(2) 坂本(平敷)尚子. 沖縄人の自問自答—知念正真『人類館』再考. 演劇学論集, 2008(46).

る」⁽³⁾。第二に、「サア、モウヨロシイレソー」の「ソー」はウチナーヤマトグチのよく使われる言葉遣いである。第三に、沖縄戦のシーンでは、三人は全て戦争の悲惨な状況を沖縄口で語る。調教師は男女と同様に沖縄人であることも作品の終わりに近づいてきた部分で明らかにされた。

新城の挙げた三つの例を一層深く理解するために、まず、「ウチナーヤマトグチ」について明らかにする。

「標準語の影響を受けて琉球方言の変化にも独自性を呈した。(中略)日本全土の広い範囲で標準語を使用する際、各地で流行っている方言の発音が混じっている。このように標準語と琉球方言の影響を受けて、形成された独自の言語がウチナーヤマトグチである」⁽⁴⁾と劉永輝が「ウチナーヤマトグチ」の形成を指摘した。

つまり、「ウチナーヤマトグチ」は、標準語の大和口の影響と、方言の沖縄口の影響を受けた独自性を持っている言語である。『人類館』の中で、「ウチナーヤマトグチ」、「大和口」、「沖縄口」が交錯して使われている。

そもそも、差別する日本本土と差別された沖縄との対立的な関係は、標準語である「大和口」と方言である「沖縄口」を通して示されていると思われる。「ウチナーヤマトグチ」の役割について、新城は次のように述べている。

その混交的な言語的多声性を(中略)実現させているウチナーヤマトグチは、「方言」という枠組みさえ越えて、(中略)日本(人)対沖縄(人)といった対峙的な主体の断層までも揺るがし、この対立的構図を差異化し交錯させていく契機となっていくのだった。⁽⁵⁾

「ウチナーヤマトグチ」は固定の対立的構図を差異化し交錯させていく役割を果たしていると言えよう。「ウチナーヤマトグチ」の混在は沖縄内部における葛藤を示唆する。

また、沖縄の社会問題にも考慮を入れて、言語的な分裂に対して、「戯曲『人類

(3) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6)。

(4) 刘永輝. 论日本沖縄方言与“沖縄日语”的形成. 中南林业科技大学学报(社会科学版), 2009(6). 筆者訳。

(5) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6)。

館』がことばの葛藤を通じて二項対立的な立場を批判し、沖縄がおかれている状況の複雑さや困難を告発したことは確か」⁽⁶⁾であると金間愛は新城とほぼ同じ考え方を述べている。

第三に、『人類館』の創作技巧についての研究成果である。

冒頭のと書きの部分には、それ以後のテキストの「展開を決定するような重要なモチーフが(中略)予告的に展示されている」⁽⁷⁾と新城がまとめた。具体的に言うと、「リウキウ、チョーセンお断り」と書いた札」が後の「方言札」の設定を提示し、「防空壕」は、後の沖縄戦のシーンを想像させることができる⁽⁸⁾ということも新城の分析から分かる。すなわち、全てのモチーフが冒頭に現れている。

と書きの部分以外、作品の「変換の空間設定」というレトリックの役割について、「作品は、変転に変転を重ね、近代沖縄の歴史的イベントを横断しながら多様な人間模様を見せていくことになる」⁽⁹⁾と新城は述べている。変換の空間設定を持っている『人類館』は断片的で散発的な印象を持たせると言えよう。

変換の空間設定を持っている『人類館』を読むとき、目まぐるしい印象を持ちながら、そこに何らかの求心力を感じることは確かである⁽¹⁰⁾と新城は、『人類館』におけるレトリックの積極的な効果を指摘した。

以上の述べたように、知念正真の戯曲『人類館』を課題として研究を行う日本側の研究者はいるけれども、主に各シーン、言語的な分裂、レトリックなどの角度からの分析にとどまっている。『人類館』における沖縄差別に言及した研究成果は少ない。

本稿は、沖縄の抱えている弱さと沖縄民衆の弱さの描写に力を注ぐ戯曲『人類館』において、沖縄差別と葛藤がどのように描き出されているか、という問題を検討したい。教育、戦争などのシーンに絞って、テキストを分析し、テキストに

(6) 金間愛. 演劇集団「創造」研究における問題提起:戯曲『人類館』を手がかりに(研究ノート). 東京外国語大学海外事情研究所 クアドライテ:四分儀:地域・文化・位置のための総合雑誌, 2013(15).

(7) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6).

(8) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6).

(9) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6).

(10) 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6).

おける人物像の設定を比較する。そして、政治的な面も、歴史的な面も考慮に入れ、『人類館』の中で語られている沖縄人が受けた日本本土からの差別とを分析していく。また、『人類館』の中で語られている沖縄内部における葛藤も検討したい。

一、対立した人物像の設定

『人類館』における登場人物は三者のみである。三者の人物像をしっかりと捉えるために、各シーンでの役を詳しく考察する必要がある。

(一) 調教師

幕が開くと、鞭を持っている調教師が登場する。調教師は、人類館に来ている観客に向かって、大和口で差別が起こった原因、人類普遍の原理などを解説する。ここでは、調教師は調教する人の役そのものである。舞台が明るくなると、琉球館に陳列された男女が視野に入る。鞭を持ちながら、調教師は大和口で男女の身体的特徴と琉球人の衣食住の習慣を軽蔑するような口調で解説する。

琉球館での解説が終わった後、調教師は一度去った。再び来ると、騒いでいる男女を鞭で調教する。調教師は男のここでの環境への不平不満を知った後も、また粗暴な振る舞いで説教する。ここでは、差別するように感じられる。

続いて、シーンは変わり、調教師は男女に日本語と日本人の秩序意識を馴れさせ、日本人としての覚悟を強制的に持たせる。調教師の差別がはっきり捉えられる。ここでの教育の目的は、ただの言語的な教育だけでなく、民衆の思想までも改造することを目標としている。

その次は、1975年沖縄で開催された海洋博覧会を題材とするシーンになる。調教師は屋良知事と当時の皇太子の役に転身する。屋良知事と皇太子はひたすら海洋博覧会で、挨拶をし、沈黙を余儀なくされた兵士たちを失語症に陥らせる。

その次、給食のシーンでは、調教師は、男女が早く大和風の生活習慣に馴染むように、芋から米へと日本本土の生活に同化するよう、強制する。また、食事が済んだ女には日本の防波堤になるよう、強制する。くしゃみを大和風にしなかった男には暴行を加えながら、首に方言札をぶら下げる。方言札というのは、1907年から、1950年まで、特に沖縄では、標準語教育推進のため、小中学校で方言

を話した生徒に罰として首から下げさせた木札である。このことから、大和風と異なる一切のことは許されないとさえ言えよう。調教師の強制的に同化を促す姿から、男女への差別が容易に捉えられる。

それ以外のシーンでは、調教師が取調官、沖縄のある精神病院の医者、日本軍人などの役に転身する。場所や調教師の役が変わっても、それらのシーンはすべて戦争と深い関係を持っている。そして、調教師が戦時中に男女のあらゆる行動を支配し、男女に軽蔑の念を抱いて横柄に指導する。これによって、戦争の悲惨な状況を再現していることは言うまでもなく、日本軍人の差別意識と大柄な態度までも鮮明に描写されている。

戦争のシーンの後、調教師は戦後の教育者という役に転身する。男女に新生沖縄県の戦後の復興と復帰運動に力を注ぐよう、強制する。

また、この作品で注目すべきことは語の位相である。調教師の言葉遣いを見よう。調教師は観客に対しては、「お待ちせ致しました。こちらが琉球館でございます」⁽¹¹⁾、「とくにご覧いただきたい」⁽¹²⁾などの敬語を使い、親切で丁寧な態度で接する一方、男女に対しては、躊躇うことなく「黙れ」⁽¹³⁾、「良く聞け」⁽¹⁴⁾のような乱暴な言葉遣いを使っている。語の位相から、調教師の男女に対する差別が容易に捉えられる。

各シーンでの調教師の役と語の位相という角度を分析すると、調教師が差別の主体で支配の者であるということが容易に捉えられる。では、陳列された男女の役はどうだろうか。

(二) 陳列された男女

琉球館に、陳列された男女は異人種と見なされる琉球人である。調教師に身体的特徴と生活習慣を差別されている。

男女が音楽とダンスに熱中している時、鞭を持っている調教師に中止させられるシーンでは、男女は普通民衆の役である。男女がいくら愚痴をこぼしたとしても、調教師には相手にされず、男女は差別の対象になっている。

(11) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 226.

(12) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 227.

(13) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 246.

(14) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 252.

続いて、男女は日本語と日本人の秩序意識を無理矢理に強制される。方言の使用は一切許されず、大和口で話さなければならない。しかも「天皇陛下万歳」という言葉をうまく発音できない男は方言札をぶら下げられる。地域ならではの特徴を示す言語である方言を話す自由さえ奪われる。男女への差別が鮮明に捉えられる。

海洋博覧会を題材とするシーンでは、男は音のない演奏に熱中している兵士の役に転身する。強い権利を握っている支配者に差別され、自分の本当に思っていることが話せない。音が出ない三弦と舞踊を通じて、自分の気持ちを表している。

続いて、給食のシーンでは男女は飲食習慣において同化される。男は大和風にくしゃみをしなかったので、方言札をぶら下げられる。すなわち、男女の沖縄の習慣はすべて排除され、調教師に同化される。そして、日本の安全と平和のために、防波堤になるように強制される。

戦争のシーンでは、男女は容疑者、アメリカからのスパイ、精神病患者、姫百合部隊隊員、鉄血勤皇隊隊員、郷土防衛隊隊員などの役に次々転身する。戦時中、日本軍人の役である調教師の支配と指導の下で行動する。さらに、男女は常に戦争の妨げと見なされる。日本軍人に問いかけても、よく「問答無用」と返事される。作品の後半、多くの戦争に関わる描写がある。戦争による男女の精神への傷も読み取れる。

それから、男女は新生沖縄県を復興する若者に転身する。郷土の再建を担う使命を戦後の教育者という役の調教師に強制させられる。

男女が差別された主体で支配された者であるということが容易に捉えられる。

以上のように、登場人物の調教師と男女の人物像の対照性がはっきり捉えられる。このような対立した人物像の設定から、大和人を象徴する調教師と沖縄人である男女の間での「差別・被差別」、「支配・被支配」という構造が容易に読み取れる。大和は差別をし、支配する主体、沖縄は差別され、支配される主体であることも捉えられる。

二、調教師からの教育

明治政府は、廃藩置県の一連政策を採ったあと、沖縄に対して強引的に教育を推進した。明治政府が教育という名目で、沖縄民衆に対して日本本土の教育を推

進んだことで、民衆の怒りを買うのを避けることができたと言えよう。では、大和人を象徴する調教師はどのような教育を行ったのか。

(一) 「天皇陛下万歳」という言葉の教育

調教師は男女に大和魂を入れてやるための教育をしている。調教師は最初に標準語を教えることに力を注いだ。最初の一步を標準語から踏み出す理由について、調教師本人は「言葉をして「文化の乗物」と言う」⁽¹⁵⁾と説明する。また、調教師は方言への軽蔑の念も示す。

しかも、調教師は真っ先に「天皇陛下万歳」という言葉から教え始める。「天皇陛下万歳」という言葉を三回も教えた後、その言葉を選んだ理由について、調教師は「天皇陛下万歳」という言葉が「実に堂々たる驚きだ。音の組み合わせといい、語呂の良さといい、雄々しさ、おさまりのよさ、安定感。典型的な日本語だ」⁽¹⁶⁾と説明し、この言葉の良さを男女に明らかにする。

津嘉山正種による一人語りの『人類館』朗読版のCDを聞くと、調教師の「天皇陛下万歳」を教える時の誇張かつ敬意に満ちたイントネーションが響いた。なぜ調教師はこんなふう「天皇陛下万歳」という言葉に敬意を込めて言うのか。なぜ調教師は「天皇陛下万歳」を何よりも重要視するのか。それは「天皇陛下万歳」という言葉が、特殊な意味を持っているからだろう。

明治政府は強制的な教育を通じて、天皇崇拜の思想を広げようとしていた。処分されたばかりの琉球の民衆をしっかりと管理するために、沖縄県でも強制的な教育を行った。調教師は「天皇陛下万歳」という言葉の教育を行うのは、男女を皇民、天皇に忠実する国民に培うためであると言えよう。

天皇崇拜を象徴する言葉「天皇陛下万歳」の教育から、日本本土からの差別が容易に読み取れるだろう。

(二) 同化教育

調教師は「天皇陛下万歳」という一つの言葉での教育に留まらず、ほかの面においても教育を行う。

(15) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 235.

(16) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 236.

まず、習うより、馴れるという形で、調教師は強引に標準語を教える。1880年、明治政府は、沖縄で、標準語を教える教師を育成するために、会話伝習所を設立した。標準語を教える教師を代表する調教師はどのように標準語を教えるのか。

本格的に標準語である日本語を教える前に、調教師は男女への要求を次にのように述べている。「日本語で話すべきだ。日本語で考え、日本語で語り合い日本語で笑い日本語で泣くべきなのだ」⁽¹⁷⁾。調教師は標準語である日本語が男女の日常生活の全部を貫くように教育を行う。

標準語を教えると同時に、調教師は方言の使用を全面的に禁止する。標準語は正しい、方言は正しくないという考え方を男女に注ぐ。この考え方に従わないと、調教師は「リウキウ、チョーせんお断り」と書かれた札を罰として首から下げさせる。方言である沖縄口の抑圧を通じて、言語の同化教育を行う。さらに、注目すべきことは、この札の上に書かれた稚拙な字、「リウキウ、チョーせんお断り」である。これらの文字から、沖縄は朝鮮と同様に拒絶され、差別されたことが読み取れる。ただの道具である札を通じて、沖縄差別を鮮明に捉えることができる。

また、くしゃみの発音でさえも日本風にしななければならないと男女は要求される。くしゃみの発音を間違えた男は再び札を下げされることになる。飲食習慣においても、常に芋を食べる男女が稲作が豊かな国、日本人と同様に米を主食とするよう、強制させられる。

その他、調教師も「日本人として、日本の文化を重んじ、(中略)日本的なものをこたく愛し受け入れる」⁽¹⁸⁾という日本人の秩序意識を男女に仕込む。男女に日本人としての覚悟を持たせ、大和風に振舞うよう、命令する。

以上の分析から、調教師は「天皇陛下万歳」という一つの言葉での教育に留まらず、標準語の教育、習慣の大和風、日本人としての覚悟など、同化教育をしていることが分かる。

大和風に振舞う調教師は男女を大和人へと同化するよう、沢山のやり方で教育をしている。支配する側の調教師からの差別が男女の生活の隅々にされている。

(17) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 236.

(18) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 235.

教育の下で、沖縄風の全ての習慣が排除され、大和風の同化を余儀なくされる。教育面における「差別・被差別」、「支配・被支配」という構造が容易に捉えられる。

三、戦争体験

「太平洋戦争の末期、沖縄は国内で唯一の地上戦の舞台となった。……（中略）……世界の戦史でもっとも激しい戦闘であった。」⁽¹⁹⁾多くの沖縄人は沖縄戦で日本軍人に差別され、「集団自決」という形で、命の終わりを告げた。沖縄戦をはじめとする戦争において、沖縄民衆は壊滅的な打撃を受けた。登場人物である調教師も陳列された男女も戦争を体験し、戦争をはっきりと覚えている。

（一）陳列された男女の戦争記憶

男は米軍の暴行を語り、女はベトナムから帰ってきた日本本土の兵隊に不平等に扱われたことを語る。男女がそれらを供述した過程、調教師は何度も「黙れ」と言ったのにも関わらず、男女は米軍と日本本土の兵隊からの差別を経験した通りに語る。男女は各戦争で受けた差別を鮮明に覚えている。

沖縄地上戦の頃の壕のシーンに変わると、日本軍人の役に転身する調教師は日本の平和と安全のために、日本の防波堤になるように強く要求する。男女は戦争の前線に動員される沖縄民衆の役になり、調教師の支配の下で行動する。調教師は郷土防衛隊の男の武器を貸してほしいとの願いも躊躇なく拒絶する。男は「天皇陛下万歳」をうまく発音できないので、アメリカのスパイであると判断され、殺される。また、赤ん坊の声が戦争の妨げと見なされ、日本軍人の役である調教師に殺される。また、男女は日本軍人に問いかけても、よく「問答無用」と返事される。男女は失語症の状態に陥られる。日本軍人の残忍な面はここから捉えられる。

残酷な米軍と日本軍人の暴行は、男女にどんな影響を及ぼしたのか。精神病院になるシーンを見よう。

(19) 外間守善、沖縄の歴史と文化。中公新書、1986、第一版、89。

戦時中の悲惨な両方とも、戦争後遺症患者であります。戦時中の悲惨な体験に怯え、戦時下の生々しい恐怖にさらされて、いたいけな魂が脆くても崩れ、精神の破綻を招いたのであります。(中略) 彼等にとって、戦後どころか、いまだに戦争は続いているのであります。⁽²⁰⁾

調教師は戦争で被害を受けた男女の様子を解説する。直接的に戦争の激しい状況や外部からの攻撃を描写するのではなく、精神への悪影響、悲惨な体験下での怯えなどの戦争後遺症を描写している。つまり、外部からの攻撃による傷は沖縄人の身体を壊すのみならず、心理的にも永遠に影響を及ぼすのである。戦争を経験した男女が戦後の生活でも戦争による心の傷が残っている。

戦時中、沖縄人は、長い間心理的な抑圧を受け、日本本土に差別されてきた。日本軍人の役に転身する調教師と沖縄民衆の男女の間での「差別・被差別」という構造が各戦争のシーンを通じて捉えられる。

(二) 沖縄戦時中の調教師

先的人物像の設定に対して行った分析から、調教師からの差別がはっきり捉えられる。しかし、調教師の役はすべて差別の主体であるという訳ではなく、男女を平等に扱う役もある。

沖縄戦のシーンで、調教師がカマーの役に転身し、沖縄出身の沖縄人になる。女がウシー婆、男がカミー兄の役に転身する。会話から、三人は同じ集落の仲間同士であることが分かる。三者は共に沖縄戦時下で、家族を失い、深い悲しみを背負っている。

日本の国土面積の0.6%しか占めない沖縄は日本の捨て子のように、第二次世界大戦において極東アジアでの戦場となった。沖縄民衆は激しい戦争に巻き込まれ、残酷で苦痛な戦争にただ耐えるしかなかった。これほど残酷な沖縄戦に直面する調教師は男女と同じ空間にいたことで戦争について話した。沖縄戦時中、戦争が三者の架橋となって、三者の間に、仲間意識が形成された。そして同じ空間にいる三者は互いに自分の悲惨な運命を話した。

調教師の役の変化と男女への態度の変化が沖縄戦のシーンからはっきり捉えら

(20) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 249.

れる。沖縄戦のシーンを通じて、調教師の本来の出身が沖縄で、沖縄人であることが分かる。沖縄人であるアイデンティティーを認識した調教師は共同体である沖縄人同士を無差別に扱うようになった。

では、沖縄出身の沖縄人である調教師はなぜ同様に沖縄人である男女を差別し、支配するのか。沖縄内部にも葛藤が生まれているからであろう。

四、登場人物間の問題

沖縄現状に直面する際、沖縄人の間でも見解の相違があり、沖縄内部における葛藤が生まれている。では、沖縄人である登場人物の調教師と男女のそれぞれの考え方と見解はどうであろう。

(一) 言語的な葛藤

沖縄内部の対立はどのように描かれているのか。まず、言語学的な立場から見よう。

調教師は男女と同様に沖縄人であることは言葉遣いから分かるだろう。第一に、「馴ればならんのラ」の「ラ」は「明かな訛り、(中略)沖縄口の訛りを潜ませている。(中略)「ウチナーヤマトグチ」が混在していることの明らかな証拠なのである」⁽²¹⁾。第二に、「サア、モウヨロシイレソー」の「ソー」はウチナーヤマトグチのよく使われる言葉遣いである。この二つの例は、調教師が沖縄人であることを明示できる証拠とも言えよう。しかし、それは純粋な「沖縄口」ではなく、「ウチナーヤマトグチ」が混在している。

けれども、後の沖縄戦のシーンでは、三人は戦争の悲惨な状況を純粋な「沖縄口」で全て語っている。このシーンでは、調教師の男女への態度も変わって、前のシーンでの態度と比べると、もっと丁寧である。男女と同様に沖縄人であることも作品の終わりに近づいてきた部分で明らかにされた。

そもそも、差別する日本本土と差別された沖縄との対立的な関係は、標準語である「大和口」と方言である「沖縄口」を通して示されていると思われる。しかし、

(21) 新城郁夫。ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争。日本東洋文化論集、2000(6)。

『人類館』には、「ウチナーヤマトグチ」も混在している。

『人類館』には、日本本土の「大和口」と沖縄人の「沖縄口」の二つの対立した差別の構造と、三つ目の「ウチナーヤマトグチ」が混在している。「ウチナーヤマトグチ」は固定した対立的構図を差異化し交錯させていく役割を果たしていると言えよう。「ウチナーヤマトグチ」の混在は沖縄内部における葛藤を示唆するものではないだろうか。沖縄内部における葛藤が「ウチナーヤマトグチ」を通じて表現されている。

(二) 内部における葛藤

「沖縄戦」のシーンを読むまでは、調教師は大和人である印象を持つ読者が大勢いるであろう。大和口で人類館に来ている観客に向かって、男女と人類館などの事柄について解説し、大和口で男女に向かって、調教する。男女に、日本国民として、天皇陛下に絶対服従する覚悟を持たせ、日本人の秩序意識を守るよう、「天皇陛下万歳」という言葉も教える。言語においても、思想においても、振る舞いにおいても、調教師は大和人であると考えられる。

しかし、調教師の言葉遣いを分析すると、特に作品の終わりに近づいてきた「沖縄戦」のシーンから、調教師は沖縄人であることが分かる。沖縄人であるのに、なぜ大和人のように振舞うのか、なぜ同様に沖縄人である男女を差別するのか。これは調教師が「新大和」であるからだろう。

「新大和」とは、「同化・皇民化教育をいち早く受容し推進した、体制派の沖縄人インテリ層」⁽²²⁾のことである、と坂本(平敷)が「新大和」の定義を定めた。「新大和」である調教師はどのように同様に沖縄人である男女を差別するのか、具体的に見てみよう。

男女の身体的な特徴を解説するシーンでは、調教師は乱暴な言葉使いで解説する。しかも、男を「鞭で顎をしゃくり上げる」⁽²³⁾、女の身体的な特徴を解説しながら、「鞭の先で裾をまくって見せる」⁽²⁴⁾。わざわざ「鞭」を使用している点から、調教師の男女に対する軽蔑的な態度が捉えられる。そのほか、男女の衣食住の特徴を解説するとき、調教師は軽蔑かつ馬鹿にするような口調で語る。

(22) 坂本(平敷) 尚子. 沖縄人の自問自答—知念正真『人類館』再考. 演劇学論集, 2008(46).

(23) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 226.

(24) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 227.

ただし、調教師はずっと差別する主体であるわけではなく、差別されたこともある。それは、飲み屋で調教師が転身した会社員の役に注目すべきだ。調教師はいくら仕事に貢献しても、能力が高くても、「リュウキュウらしい」⁽²⁵⁾から、昇進できないという苦しみ耐えるしかなかった。就職において、調教師は沖縄人であるから、差別された。また、差別された調教師は同情を寄せてきた男の首から方言札はずした。

「新大和」である調教師が差別する主体であり、差別された主体でもある。自分が男女より高い地位であることを維持しようとするため、「新大和」である調教師は大和風に振舞い、男女を差別していた。沖縄人である調教師は沖縄外部から差別される対象であるが、男女より高い地位を維持しようとしている。なので、また他の差別する対象、男女を見つけて差別している。これは差別の重層化である。差別の起源は差別される側、「新大和」である調教師に遡ることができると言えよう。

また、男女の間にも葛藤が生まれている。男は調教師が去った後、「急に態度がガラリと変わり、横柄に振る舞い始める」⁽²⁶⁾。女より男の方が地位が高いということを女に示すために、家みtainな刑務所での経験を優越感に浸りながら、大げさに言い、自分は大した物だということを女に思わせる。調教師が去ると、男は女に襲いかかる。調教師がいない時、男は女をいじめる。

女は男の語った秘密を言わない、「絶対、雷が落ちてとも言わない」⁽²⁷⁾と約束したのにも関わらず、調教師に脅迫されると、約束を破り、男を裏切ってしまう。

また、作品の終わりのシーンでは、差別する調教師が死んで、差別される男は鞭を拾って、調教師風に振舞っている。これは、また新たな差別が始まることを指しているのだろう。「差別は再生され円環化してしまう。差別・支配者は死んでも、差別・支配は残る」⁽²⁸⁾ということを示唆する。

「ウチナーヤマトグチ」の混在や「新大和」である調教師の態度の変化、男女の間やり取り、調教師が亡くなった後、男の反応などから、沖縄人内部における葛藤と問題が捉えられる。知念正真は沖縄外部からの差別だけでなく、沖縄内部

(25) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 243.

(26) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 228.

(27) 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991, 第一版, 232-233.

(28) 坂本(平敷)尚子. 沖縄人の自問自答—知念正真『人類館』再考. 演劇学論集, 2008(46).

における問題へもフォーカスをあてているのだと言えよう。

沖縄県が設置されてから、現在に渡るまで、沖縄社会は多様な問題を抱えている。例えば、沖縄が県として設置されたばかりの時、明治政府の政策に従って新たに発展の道を開拓していくか、それとも琉球風な生活をそのまま継続していくか、食い違った意見があった。それらの意見が『人類館』の登場人物、調教師と男女を通して示される。調教師をはじめとする「新大和」は明治政府の文明開化政策などに従って、積極的に大和人の同化教育を受容し、推進した。一方、男女をはじめとする沖縄人はそのまま沖縄の習慣で生活を送っている。

また、敗戦後、アメリカの占領のもとで、沖縄人はアメリカに対してどのような態度を取るべきか、日本に復帰すべきかどうかなど、幾度も様々な問題に直面した。「復帰は、沖縄の民衆を、これまでとは異質の日本的秩序の枠に組み込むことになった。こうした状況は、多くの民衆を苛立たせ、失望させた。」⁽²⁹⁾ 調教師をはじめとする「新大和」は、熱心に日本に復帰するよう、力を注いだ。しかし、一方、男女をはじめとする沖縄人はどのような状況においても、消極的な態度を取り、差別されても反抗しなかった。これらの問題に直面する際、沖縄人の間でも見解の相違がある。これは沖縄の現状でもある。

おわりに

差別という問題は沖縄県が設置された後、ずっと沖縄民衆を悩ませている。現代に至っても、沖縄差別はまだ残っている。日本の一部となったとは言え、よく日本本土に不平等に扱われ、差別されてきた。沖縄差別に直面する際、沖縄人の間でも食い違った意見がある。どのように沖縄差別に直面すべきか、新しい生き方を開拓するのか、それとも、消極的に琉球人の古い習慣を受け継いでいくのか。

沖縄出身の作家たちは各自独特な方法で、沖縄差別を描くことに力を注いでいる。その中で、『人類館』は戯曲という形で、観客の興味を引き起こさせる。作者、知念正真は教育、戦争などの角度から、沖縄で起こった近現代の重大な事件を題材として表現巧みに言い回すレトリックという手法で人物像の設定、調教師

(29) 新崎盛暉. 沖縄現代史. 岩波新書, 1996, 第一版, 54.

からの教育、沖縄戦をはじめとする戦争を通じて、沖縄差別を描写している。

さらに、知念正真は沖縄外部からの差別に視点を置くのみならず、沖縄内部における葛藤をも重要視する。作者は沖縄の直面している状況の複雑さや困難を人々に理解してもらいたいと考え、『人類館』を創作した。作者は沖縄差別を描き出し、しかも淡々と沖縄差別を描き出すのではなく、各シーン滑稽味を持ちながら、観客あるいは読み手を笑わせる。観客あるいは読み手に沖縄差別を一層強く印象づけていると言えよう。それらが『人類館』の評価が高く、今でも、魅力を保っている理由であろう。

本稿の研究を通じて、知念正真の文学作品『人類館』の中で語られている沖縄差別を深く分析するだけでなく、沖縄の直面している状況の複雑さや困難を分析し、現代の沖縄人がどのように沖縄の一連の問題に直面すべきか、どのような生き方を選ぶべきか。新しい生き方を開拓するのか、それとも、消極的に琉球人の古い習慣を受け継いでいくのか。これらのことを考える際にも役に立つ。現代の沖縄人が沖縄差別という問題をもっと身近に感じて危機感を持つようになる。社会的な価値が本稿の研究にもある。

本稿はただ知念正真の戯曲『人類館』のみを分析し、沖縄差別と葛藤を検討した。他の沖縄差別に言及した作品と知念正真の戯曲『人類館』との共通点と相違点などを比較するのは今後の課題にする。

参考文献

- 坂本(平敷)尚子. 沖縄人の自問自答—知念正真『人類館』再考. 演劇学論集, 2008(46).
- 新城郁夫. ちねんせいしん『人類館』論—他者化をめぐる言葉の闘争. 日本東洋文化論集, 2000(6).
- 刘永辉. 论日本冲绳方言与“冲绳日语”的形成. 中南林业科技大学学报(社会科学版), 2009(6).
- 金間愛. 演劇集団「創造」研究における問題提起: 戯曲『人類館』を手がかりに(研究ノート). 東京外国語大学海外事情研究所 ケアドライテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌, 2013(15).
- 新里米吉. 沖縄の文学<近代・現代編>. 沖縄時事出版, 1991.
- 外間守善. 沖縄の歴史と文化. 中公新書, 1986.
- 新崎盛暉. 沖縄現代史. 岩波新書, 1996.